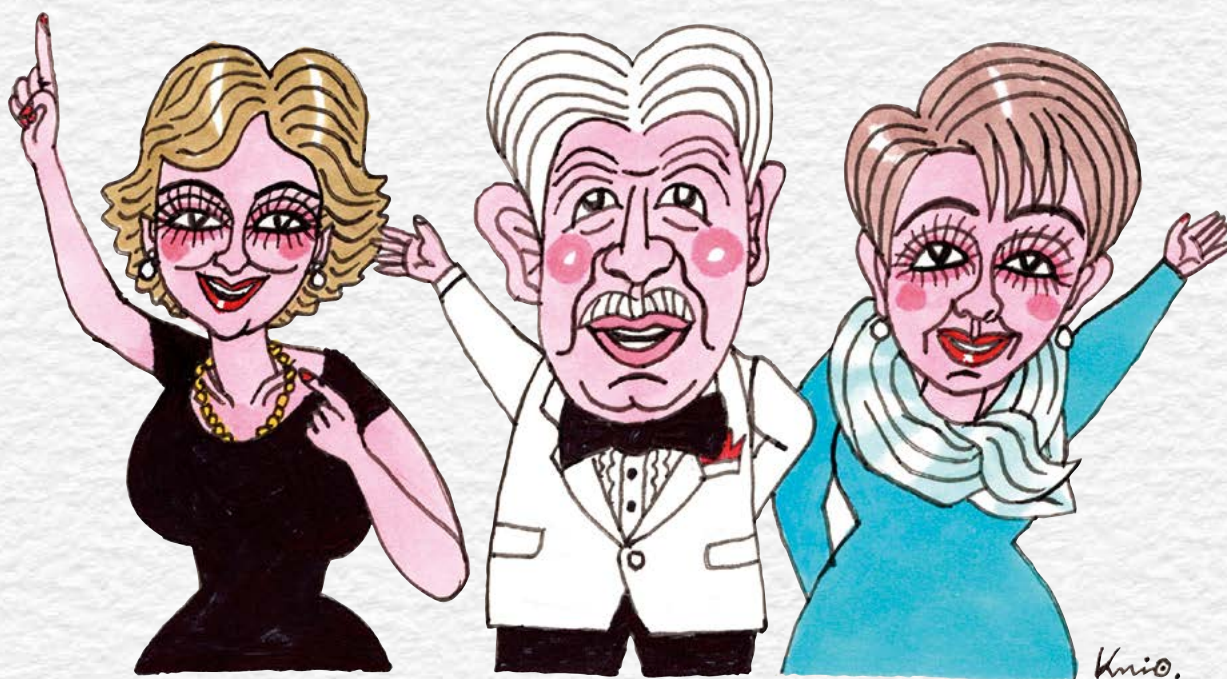


一般社団法人
日本旅行作家協会

創立 50周年



2代会長 兼高 かおる

創立会長 斎藤茂太

3代・現会長 下重 暎子



一般社団法人

日本旅行作家協会

Japan Travel Writers' Organization (JTWO)



JTWO これまでの50年 下重会長 Interview これからの50年

「旅好き」が集まっておしゃべりや情報交換をしましょう、と数人で上野の料理屋に集まったのをきっかけに、日本旅行作家協会が誕生したのが50年前。思いもよらぬコロナ禍を経て、コロナがようやく収束を見せた今、旅のカタチも大きく変わるはず。3代目・現会長の下重暁子に「日本旅行作家協会」の来し方行く末を語っていただきました。



撮影：戸川 覚 会員

◎コロナで辛い思いをした今こそ トキメキのある旅を

——日本旅行作家協会も設立50年を迎えました。創立時からのメンバーでいらっしゃる下重会長に思い出話や、今後こうありたいなど話をお聞きしたいのですが。コロナを経験した今、旅のカタチが変わりましたね。

「皆が辛いコロナを体験して、旅のカタチは変わったし、また、今こそ変わらなければいけないと思います。旅って非日常の異次元に羽ばたくことです。トキメキのある旅に出たい。自発的な自分だけの旅を見つけるときです。私は旅に出るとき、飛行機が舞い上がり、街の灯が下方で遠くなっていくのを窓から見るのが好き。『浮世のバカは起きて働く』なんて言葉が思い浮かぶほど、この時間を味わいたくて、私は起きて働いてきたんだなあ、と実感します。どこへ行くかは問題ではないの」

◎海外旅行が自由化された1964年に初めての海外旅行

——いつ頃から旅好きになられたのですか？

「日本は1964年に海外旅行が自由化されました。1ドル360円のレートで、500ドルの持ち出しが許されました。1964年というのは私にとって重大な意味があるの。東京オリンピックが開催され、NHKの番組はほぼオリンピック一色になりました。当時、私はNHKのアナウンサー、結構売れっ子でレギュラー番組に縛られていて、休みなど自由に取れない環境でしたから、この時とばかりに10日間の休みを取ってヨーロッパに出かけました。

20代の頃ですから怖いもの知らずで、実際に怖い思いもしましたが、しっかり旅程をこなして10日後にはNHKに出勤しました。

スタートはパリ。日航に紹介してもらったフォーブル・サントノレのホテルでは、フロントの男性がフランスの映画スター、ロベール・オッセンに似ているイケメンだったので、私がちらちら目をやっていたの。好意を持っていると勘違いしたのか、ルームサービスを頼んだら、かのフロントマンが自ら料理を運んで来て…やばいことになりそうになって、逃げました。女の一人旅なんてその頃はなかったの。

スペインでは修道院に泊めてもらいましたが、有名人の修道院長が実は大酒飲みで、旅どころではなかったし、ポルトガルでは観光バスに乗ると、当時、私の番組の台本を書いていた直木賞作家になる前の五木寛之さんに勧められてポルトガルも行き、ソ連へ行ってボリショイバレエも見たし…無鉄砲で怖い思いもしながら、無事に職場に復帰しました。

その頃から日本人の海外旅行ブームが始まり、国内旅行も物見遊山の団体旅行から個人旅行へと移ってきました。女性誌がこぞって旅のページを掲載するようになって、女性の旅が盛んになり、おしゃれやグルメ、温泉、小京都など旅が変わってききましたね」

日本旅行作家協会 設立宣言

われわれはいま、空前の旅行時代に突入したことを知る。内外に行き交う旅行者の群は、まさにホモ・モビリスの到来を告げ知らせている。しかし、現状をつぶさに観察するとき、われらは旅がいたずらに商業主義に毒され、劣悪低級な情報に荒らされ、文化としての旅が忘却され、平和と国際文化交流へのパスポートとしての旅が、かえって国際不信や誤解の種になり、偏見と憎悪をあおっている現状であるのを憂う。とくに、その歴史において、鎖国と孤立の時代を長く経験したわが国民は、ごく近年に至って、ようやく国際社会へ自由に参加できるようになったものの、未だその日浅く、孤立中培った文化、伝統、風俗、慣習の特殊性また根深く、容易に国際社会と馴染み得ず、多くの緊張と問題を残しつつ、今日に至っている。わ

れわれはこのような中で、旅を何よりもまず文化としてとらえ、旅を通して生で歴史の意味を問い、政治、思想、宗教などにとられぬ姿勢と活動の中に、健全中正な国際理解と文化交流に資することを願う作家集団である。しかも、増大する旅行人口に比して、旅行作家がこの国において占める地位は、まことに小さく、かつ貧しい。われらは文化人としての自覚も新たに、旅という現代の文化現象を正しく捉えるペンマンシップを確立し、その地位を強固にし、もってわが国の旅行動態の向上、日本の対外イメージの改善、外国の旅行作家団体及び個人との交流などを計り、旅を通して広汎な国際文化活動を展開せんとする。

1973年9月13日



◎旅好きが集まって、定期的に会合を持つようになったのが日本旅行作家協会の始まり

日本旅行作家協会が創立したのは1973年、旅行ブームが盛んになり始めた頃ですね。

「旅好きが上野の料理屋で集まっておしゃべりをして楽しんだのがきっかけですね。これから定期的に会って旅に関する情報交換や親睦を深めようじゃないかと、初めは10数人のメンバーで、1カ月おきの第二金曜に例会を開こう、参加者は自主的に料理屋に連絡すること、などざっくりと決めて始めました。

国鉄のディスカバー・ジャパンのキャンペーン(1970年から)が旅を変えました。ポスターも素敵だったし、自分で知られる日本を見つけなさいという意味のコピーも良かった。円高ドル安も海外旅行熱を高めて、政府のテンミリオン計画など旅を推進する後押しもあって海外旅行ブームが起きました」



国鉄の「ディスカバー・ジャパン」ポスター

初代会長の斎藤茂太さんとの楽しい思い出などお聞かせください。

「ドイツやハンガリー、オーストラリアなどへ斎藤ご夫妻と一緒しました。四谷のお宅では茂太さんの母上・輝子さん(斎藤茂吉夫人)に可愛がっていただきました。80歳を過ぎて南極旅行をするような豪快な方でした。

茂太さんは飛行機が大好き、家をお訪ねして、どうぞとかわれて座ると、飛行機会社からもらった古い飛行機の椅子なの。『それではシートベルトをしてお話しましょう』なんて、お茶目な方でした。

当時は旅をしても、飛行機は斎藤茂太さん、船は柳原良平さん、動物は戸川幸夫さんと錚々たるスペシャリストが会員にいらっやあって楽しかった。ドイツ、ハンガリー、香港、オーストラリアなど1、2年に一度はJTWOの仲間とご一緒に旅しましたね」

会報第1号

◎コロナが収束して、やっと海外旅行が楽しめるようになりましたが、最近どこかへ旅行なさいましたか？

「私は古美術の藍染『筒書』(つつがき)のコレクターなの。江戸時代から伝統ある民芸でおめでたいもの、例えば大漁旗や婚礼布団などを職人が手描きで染めた古裂(こぎれ)を百数十点集めています。数年前にパリ日本文化会館で筒書の展覧会を開きました。フランス人が多数観に来てくれて好評でした。それをご縁にパリには毎年行っています。コロナでご無沙汰して、この6月、4年ぶりに行きました。今回は『自分が移動するのではないパリ』を体験してきました。

パリを象徴するエッフェル塔がいちばん良く見えるカフェに陣取って、お昼頃から夜の10時過ぎまで観察しました。エッフェル塔の様相も変わるし、周囲の人も刻々と変わる。夕方になると夕焼けてくるし、6月のヨーロッパはなかなか日が暮れなくて、でも、10時になるとエッフェル塔がパッと点灯するの。一斉に歓声が上がって拍手が湧きましたよ。感動して、こういうパリもありかなあ、と感じました。自分が移動するのではなく、周りが変わるのを見る。エッフェル塔の存在感が人を惹きつける。自分が動かないで、定点を決めればよい。そういう旅もありでしょう。

長い間、旅をしていると、あそこへ行くとあの人に会える、懐かしい人に会えるから行きたいと言うところがあちこちにあります。それが旅の魅力ね。実はパリもそうなの」

◎外国からの旅行者にはサンマ、柿、栗を味わって欲しい

最近、インバウンドが盛んで、外国人旅行者も増えました。彼らにどんな日本を見て欲しいですか？

「本当の日本を見て行ってほしいと思います。まずは入口からと言うのならば、レンタルのペラペラした着物を借りて着るのもいいけれど、本物の和服の美を知ってもらいたい。本物は高いけれどね。日本料理に関しても、本物の味を知ってほしい。高い料理でなくてもいいから、シンプルな本物、例えば柿や栗、美味



味しいサンマの塩焼きを味わって帰ってほしいです。外国人旅行者の中に、歌舞伎や能、文楽などを熱心に観てくれる人がいるのは嬉しいです」

10周年記念パーティーを報じた「タリフジ」

◎これからの50年「敢然として一人で旅立ちなさい」

最近、若者が外国旅行をしがなくなった、なんてことも言われますが、彼らに何かアドバイスは？

「いつでも行けるから今旅にでなくてもいい、と考えるのかしら。旅の情報が溢れているから、行った気になって、わざわざ行かなくてもいいと考えるのかも。でも、最近の事柄では、『天井のない牢獄』と言われているガザのことを考えてはどう？ ウクライナにも興味を持ってほしい。パリだって観光ばかりでなく、ストライキや暴動もあります。せっかくオペラを見に行くことにしていたら、舞台装置の係がスト中なので休演になったこともあります。確かに旅は危険なものもそこら中に落ちています。何が待っているのか分からないからこたえられないよ。体力に自信がなくなったら、その年代にふさわしい旅があるはず。私は車椅子を押してくれるオトコを見つけてあるの。

旅は人の真似ではダメ。家族や日常から離れられるのは旅だけでしょう。『個』になれるのは旅行だけです。日常を引きづらないで、敢然として一人で旅立ちなさいと言いたい」

今後の旅はどうありたいですか？

「日本はアメリカに負けてすっかりアメリカナイズされてしまったけれど、ヨーロッパに行くとき、経済力の差はあるけれど、敗戦国もそんなに影響を受けずに自分の文化を守っているのね。小さな村にもそれぞれに違う文化がある。日本はもう経済力では世界にかなわないでしょう。生き残る道は文化だだと思います。日本人はもっと日本の文化を大事にしましょうよ。JTWOに望むのは、『斎藤茂太賞』のような良い企画を続けることね。続けることに意義があります」

(聞き手：大久保 登喜子会員)



2023年の斎藤茂太賞最終選考会にて

1973年9月
設立宣言、協会発足会員30名。

1974年6月
会報第1号発行。

1977年4月
会のロゴマーク決まる。

1979年1月
国別グループ発足。会員数87名。

1983年11月
10周年記念パーティー（パレスホテル）「第1回日本旅行作家協会賞」を戸塚文子会員に贈る。永久名誉会員に松尾芭蕉、マルコ・ポーロを推薦する。

1986年3月
評議員制度導入 会員数150名。

1987年4月
インド親善旅行（会員25名を含む46名が参加）。

1988年8月
事務所を港区六本木の藤島泰輔事務所に移す。

1989年11月
16周年記念パーティー（ホテルオークラ）「第2回日本旅行作家協会賞」を兼高かおるの会員に贈る。永久名誉会員に玄装三蔵を推薦する。

1990年11月
会報を「JTWO NEWS」の名称で復刊。会員数200名を越す。

1991年5月
部門別グループ発足。

1993年5月
IDカードの発行始まる。会員数300名を越す。

11月
20周年記念パーティー（京王プラザホテル）「第3回日本旅行作家協会賞」を宮脇俊三会員に贈る。

1994年5月
「ツアー・オブ・ザ・イヤー'93」（第1回）を発表。会員数400名を越す。

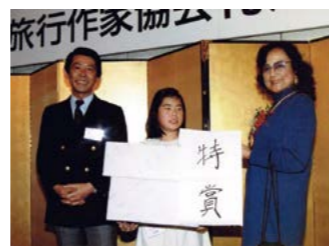
1995年5月
硫黄島慰霊ツアー、自衛隊と交流。

6月
香港マカオ旅行。

日本旅行作家協会



1989年16周年 役員集合



1989年11月 斎藤会長のお孫さん特賞



1989年16周年記念パーティー抽選会で、三浦雄一郎提供のスキーを安西保が当てる



1989年11月16周年記念パーティー



1999年 第1回特別例会（群馬県嬬恋村にて）



1993年 自動車研究会 那須旅行



1987年 ニューデリーのメリディアンホテル前で



1995年 硫黄島へ輸送機の前で

50年の歩み



2003年11月 三浦雄一郎 協会賞



2003年30周年協会賞授賞式にて三浦敬三（雄一郎の父上）



2008年2月 兼高誕生パーティーで



2008年2月 兼高かおるの誕生日パーティーで祝歌を歌うベギー葉山



2008年9月 特別例会 人吉市&熊本



2008年 特別例会 人吉市&熊本



斎藤会長と兼高副会長



2009年12月 チュニジア共和国大使館でパーティ



2008年 氷川丸見学

1996年10月
会報を「TOURISM」の名称でリニューアルする。

1998年10月
事務所を千代田区麹町の日本フォトリサーチセンター内に移す。

1999年2月
25周年記念パーティー（京王プラザホテル）「第4回日本旅行作家協会賞」を森本哲郎会員に贈る。

9月
群馬県嬬恋村で第1回特別例会。

2000年4月
事務所を中央区銀座の明興ビル4階に移す。

9月
協会のホームページを開設。

2000年9月
特別例会で熱海市を訪問。

2001年9月
アメリカで同時多発テロ発生。特別例会で蒲郡市を訪問。

2002年9月
特別例会で箱根町を訪問。

2003年11月
30周年記念パーティー（郵船クルーズ「飛鳥」船上）「第5回日本旅行作家協会賞」を三浦雄一郎会員に贈る。

2004年9月
特別例会で大仁（伊豆の国市）を訪問。

2005年9月
特別例会で栃木県那須塩原市を訪問。

2006年9月
特別例会で長野県軽井沢町を訪問。

11月
斎藤茂太会長逝去。

2007年1月
新会長に兼高かおるの副会長が就任。

4月
キューバを訪問。

9月
特別例会で山形県鶴岡市・酒田市を訪問。

2008年3月
キューバを訪問。

私の旅、私の思い出 PHOTO セレクション

旅先での印象的なワンシーンや、今は見ることができない貴重な風景など、JTWO 会員から届いた写真をご紹介します。



キウ聖ソフィア大聖堂
(2017年5月28日)
細田 尚子



ハウスタンバラン（精霊の家）
(バファニューギニア セビック川流域 / 1997年)
川口 菜



ビルの谷間への着陸、香港啓徳空港最後の日
(中国 香港九龍土瓜湾 / 1998年7月5日)
小柳 淳



世界遺産に登録されたばかりの当時のサグラダ・ファミリア
(スペイン バルセロナ / 2006年5月1日)
鈴木 一吉



オデーサのオペラ・バレエ劇場
(ウクライナ オデーサ / 2012年5月13日)
峰村 均

9月 特別例会で熊本県人吉市・熊本市を訪問。

2009年7月 マレーシアを訪問。

8月 一般社団法人として登録。

10月 特別例会で気仙沼市を訪問。

12月 チュニジア大使館でパーティー。

2010年9月 特別例会で鳥取・米子市を訪問。

2011年4月 宗教学人平等院と日本旅行作家協会が共催する世界遺産イベント「日没への思慕 世界遺産の夕べ〜日本の復興と被災者の鎮魂のために〜講演とコンサート」が行われた。

5月 兼高かおるの会長が退任して名誉会長に。新会長に下重暁子副会長が就任。

10月 特別例会で山形県蔵王町・宮城県気仙沼市を訪問（東日本大震災義援金を気仙沼市に贈呈）。

2012年9月 特別例会で山口県下関市を訪問。

2013年4月 東京晴海の東京ビッグサイトで開催された「旅博」に参加。

9・10月 特別例会で鹿児島県の霧島・鹿児島・指宿・南九州の4市を訪問。

11月 40周年記念パーティー（目黒雅叙園）「第6回日本旅行作家協会賞」を椎名誠名誉会員に贈る。

2014年4月 40周年記念写真展を東京・四谷で開催。

10月 特別例会で群馬県中之条町を訪問。

2015年4月 キューバ旅行。

日本旅行作家協会



2011年4月 平等院でコンサート



2013年 特別例会 鹿児島



2013年4月 旅博参加



2014年 特別例会 中之条町



2015年 女性の旅 バリ旅行



2013年11月 40周年に椎名誠が協会賞を受賞



2016年10月 特別例会 郡上市



2015年 特別例会 十津川村



2019年3月 エジプトグループ「アラビアンナイト」イベント



2016年7月 斎藤茂太賞受賞者と

50年の歩み



2017年 特別例会 小豆島



2017年10月 フランスの勲章を叙勲した菊間潤吾を祝うパーティーにて



2018年 特別例会 千曲市



2018年 第3回講演例会 講演する斎藤茂一



2019年2月 兼高かおるの偲ぶ会



2018年3月 イタリア講演会



2018年 街道研究会



2018年8月 ラオス大使館でパーティー



2019年12月 榎村国夫講演会

2015年10月 特別例会で奈良県十津川村を訪問。

2016年3月 講演例会の第1回に下重暁子会長が講演する。

7月 斎藤茂太創立会長の遺志を受け継ぎ、旅行文化と紀行文学の発展に寄与することを目的に「斎藤茂太賞」を設立、第1回の同賞に星野保著『菌世界紀行』（岩波書店）と、同特別賞に田中真知著『たまたまザイル、またコンゴ』（偕成社）を選定。

10月 特別例会で岐阜県郡上市を訪問。

2017年3月 講演例会第2回に塩村文夏会員が講演する。

7月 第2回斎藤茂太賞に今尾恵介著『地図マニア 空想の旅』（集英社インターナショナル）、同審査員特別賞に村上大輔著『チベット 聖地の路地裏一八年のラサ滞日記』（法蔵館）を選定。

10月 特別例会で香川県小豆島を訪問。フランスから叙勲した菊間潤吾会員を祝うパーティー開催。

2018年3月 講演例会第3回に斎藤茂一（初代会長 斎藤茂太の子息）が講演する。

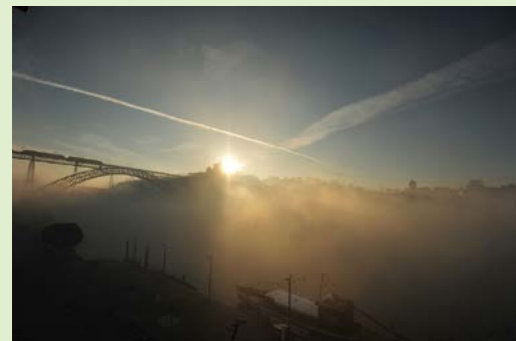
3月 イタリア政府観光局の三浦真樹子の講演会を開催。

7月 第3回斎藤茂太賞に若林正恭著『表参道のセブ犬とカバーニヤ要塞の野良犬』（KADOKAWA）を選定。

9・10月 ラオス大使館でパーティー。特別例会で長野県千曲市を訪問。

2019年1月 兼高かおる名誉会長（2代目会長）逝去。

2月 「兼高かおる名誉会長偲ぶ会」がホテルニューオオタニで行われる。



朝霧輝くドン・ルイス1世橋 (ポルトガル ポルト/2012年2月6日) 岩越 和紀



ロンドン ケータイの普及で消えゆく風景 (イギリス ロンドン/2012年7月) 片山邦夫



深呼吸 (秋田県 男鹿半島/2017年11月) 西 樹里



ビクトリアの滝 (ジンバブエ/2018年5月) 神澤 隆



熊の毛皮を被って練り歩く厄払いの奇祭 (ルーマニア モルドヴァ地方コマネシュティ/2019年12月30日) 林 莊祐



漂流列車 (宮城県女川町/2011年) 芦原伸

3月 講演例会第4回に吉屋敬会員が講演する。

7月 第4回斎藤茂太賞に、たかはたゆきこ著『おでかけは最高のリハビリ！ 要介護5の母とウィーンを旅する』（雷鳥社）を選定。

10月 特別例会で兵庫県淡路島を訪問。

12月 学校法人川口学園、早稲田速記医療福祉専門学校の依頼で、種村国夫会員が「クルーズ画伯の語る世界」講演を行った。

2020年7月 第5回斎藤茂太賞に若菜兒子著『旅の断片』（アノニマ・スタジオ/中央出版）を選定。

2021年6月 第1回兼高かおる賞を漫画家、随筆家：ヤマザキマリに贈る。

7月 第6回斎藤茂太賞に山本高樹著『冬の旅 ザンスカール、最果ての谷へ』（雷鳥社）を選定。

2022年3月 講演例会第5回に今井通子会員が講演する。

7月 第7回斎藤茂太賞に佐藤ジョアナ玲子著『ホームレス女子大生 川を下る in ミシシッピ川』（報知新聞社）を選定。

10月 特別例会で群馬県嬭恋村を訪問。森羅万象の会、山形県小国町にて開催。

2023年3月 講演例会第6回に山口由美会員が講演する。

7月 第2回兼高かおる賞を俳優：山口智子に贈る。第8回斎藤茂太賞にデコート豊崎アリサ著『トゥアレグ 自由への帰路』（イースト・プレス）を選定。

11月 50周年記念パーティー（ザ スtrings表参道）「第7回日本旅行作家協会賞」を池澤直樹に贈る。

日本旅行作家協会 50年の歩み



2019年 特別例会 兵庫県淡路島



2022年10月 森羅万象の活動が記事に



2022年10月 森羅万象 山形県小国町にて



2022年3月 第5回講演例会 講演する今井通子会員



2022年 特別例会 群馬県嬭恋村



家族 (ケニア マサイマラ国立保護区/2011年4月26日) 小澤 里江



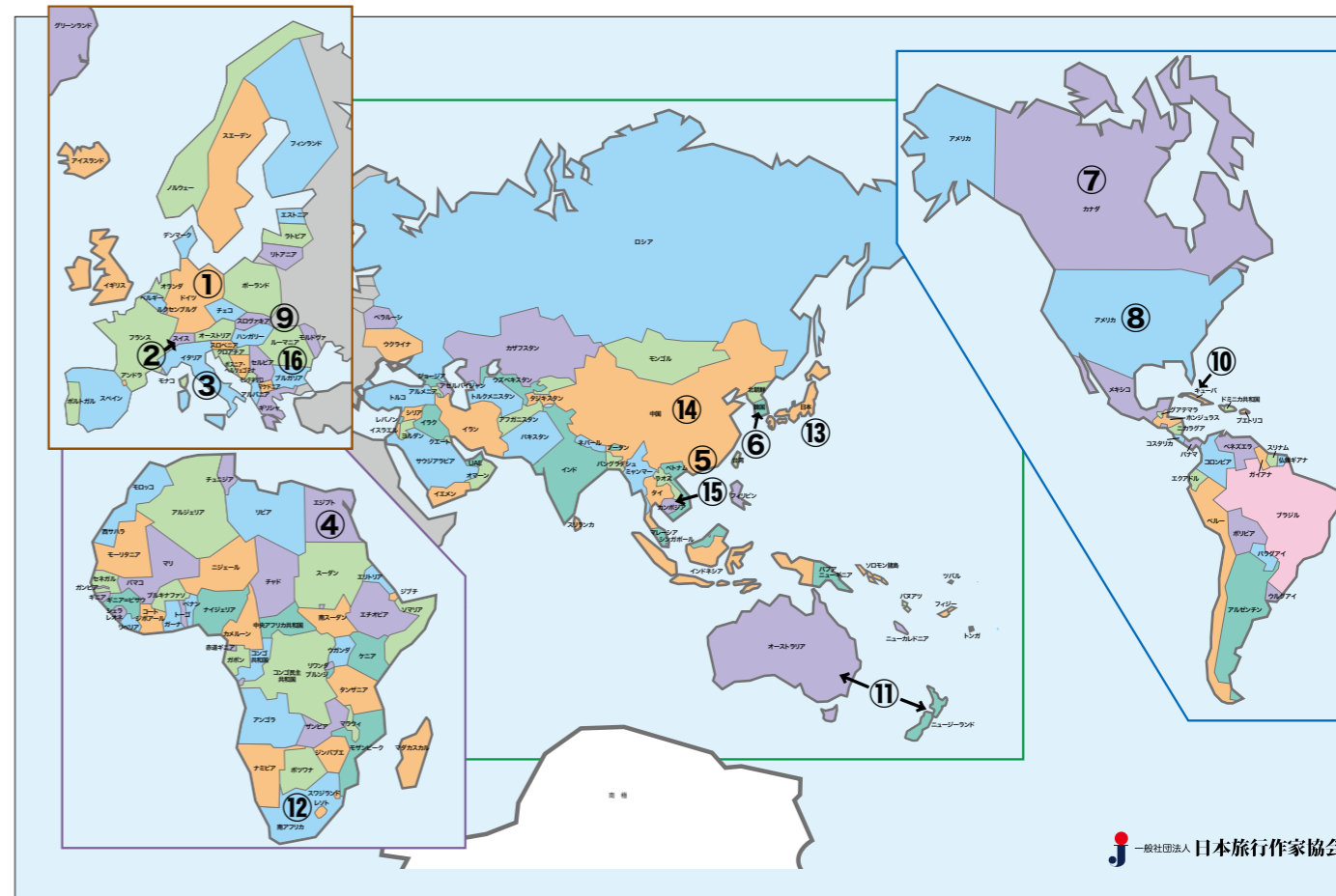
オストログ修道院 (モンテネグロ オストログ/2023年9月6日) 今井 通子



アルゲ・バム要塞 (2003年12月26日の大地震で壊滅) (イラン 古都バム/2001年3月13日) 戸川 寛

私の旅、私の思い出 PHOTO セレクション

日本旅行作家協会の活動



<国別/地域別グループ>

現在、16の国別・地域別グループがあり、在日外国政府観光機関などとの交流と親睦を図りながら、研究会や独自のツアーを実施するなど、活発な活動を続けています。

- ①ドイツ 世話人：沖島 博美 サブ：野田 隆
- ②スイス 世話人：鈴木 光子 サブ：小谷 明/八重野 充弘
- ③イタリア 世話人：野口 正二郎 サブ：種村 国夫/小谷 明/立岡 博
- ④エジプト 世話人：村治 笙子 サブ：大久保 有満子/細田 尚子
- ⑤香港・マカオ 世話人：小柳 淳
- ⑥韓国 世話人：小川 裕司 サブ：片山 邦夫/大久保 有満子/小澤 里江
- ⑦カナダ 世話人：林 弥太郎
- ⑧アメリカ 世話人：片山 邦夫 サブ：河田 雅史/松田 朝子
- ⑨中・東欧 世話人：渡辺 節子 サブ：大久保 有満子
- ⑩キューバ 世話人：八重野 充弘 サブ：中嶋 芳子
- ⑪ANZ (オーストラリア+ニュージーランド) 世話人：片山 邦夫 サブ：永田 朝子/小川 裕司
- ⑫南アフリカ 世話人：渡辺 節子 サブ：大久保 有満子
- ⑬日本 世話人：新家 靖之 サブ：種村 国夫/片山 邦夫/林 莊祐
- ⑭中国 世話人：山野 修 サブ：秋山 秀一/林 莊祐
- ⑮カンボジア 世話人：峰村 均 サブ：森田 徳忠/八重野 充弘
- ⑯バルカン 世話人：芦原 伸 サブ：ローレン・シェウ/片山 邦夫/林 莊祐

<部門別グループ>

旅に関連する研究テーマ、あるいは趣味などを徹底的に追究しようというのが部門別グループで、現在9グループあります。こちら、国別・地域別グループの活動に劣らず、盛んに活動を行っています。

- 旅行情報研究会 世話人：高梨 洋一郎 サブ：鈴木 一吉/山田 恒一郎
- クルーズ&トラベル研究会 世話人：種村 実穂 サブ：片山 邦夫/増田 和美
- 飛行機研究会 世話人：河田 雅史 サブ：片山 邦夫/神澤 隆
- 美術と旅を楽しむ会 世話人：中嶋 芳子 サブ：荒垣 さやこ
- 鉄道研究会 世話人：野田 隆 サブ：三浦 一幹
- 女性の旅研究会 世話人：種村 実穂 サブ：松田 朝子
- 世界遺産研究会 世話人：細田 尚子 サブ：大久保 有満子/神澤 隆
- 旅と俳句を楽しむ会 世話人：大久保 登喜子 サブ：山崎 透子
- 森羅万象の会 リーダー：今井 通子 世話人：戸川 寛/芦原 伸

各活動に興味のある方は、事務局までぜひお問い合わせください。

日本旅行作家協会賞

日本旅行作家協会賞は、著作、講演、メディア活動等を通じ、日本と世界の旅行文化の向上に貢献した人物や、旅行、探検、冒険等の行動で人々に夢や感動を与えた人物を顕彰します。

創立10周年の1983年に創設以降、16・20・25・30・40年の節目の年に開催しており、今回の第7回「日本旅行作家協会賞」は作家・池澤夏樹氏にお贈りします。

第1回(1983年) 戸塚文子



1913年～1997年。東京生まれ、日本女子大卒。編集者、紀行作家。女性として初めてジャパン・ツーリスト・ビューロー(現JTB)に入社。同社出版事業部に移り、雑誌『旅』の編集者として活躍する。1948年、女性初の編集長となり世界各国の旅行情報を紹介。1957年には松本清張の『点と線』を『旅』に掲載し、推理小説ブームのきっかけを作った。1961年に退社して、フリーとなり、世界各国に旅の軌跡を残し、紀行文を執筆。独身で美貌のキャリア・ウーマンの元祖、戦後の女性の社会進出の草分け的存在となる。

第4回(1999年) 森本哲郎



1925年～2014年。東京生まれ。東京大学卒業。ジャーナリスト、評論家。東京新聞、朝日新聞に在籍、特派員として世界各地を回った。その経験を経て評論活動に転出し、世界の文明、滅びゆく文化への詩情、哀惜などを世に訴えた。豊富な旅行体験に裏付けられたユニークな比較文化的考察が注目された。『文明の旅』などの旅に関する著作のほか、『ことばへの旅』などの著述も多い。東京女子大学教授などを歴任した。

第2回(1989年) 兼高かおる



1928年～2019年。神戸市生まれ。香蘭女学校卒業後、ロサンゼルス市立大学に留学。ジャーナリスト、トラベルライター。「ジャパン・タイムズ」などのフリーランス記者として活躍。1959年～1990年『兼高かおる世界の旅』(TBS系)でナレーター、ディレクター兼プロデューサーとなる。取材国は約150国、距離にして地球を180周した。1958年、スカンジナビア航空が主催した「世界早回り」に挑戦し、73時間9分35秒の新記録(当時)を樹立。2007年～2011年、日本旅行作家協会の会長を務める。

第5回(2003年) 三浦雄一郎



1932年～。青森市生まれ。北海道大学卒業。プロスキーヤー、冒険家、獣医師。1966年、富士山での直滑降を成功させ、この時プレーキとしてパラシュートを使用したことから後にパラグライダーが開発される。1970年にはエベレストの8000m地点からの滑降、1985年、54歳で南アメリカ大陸最高峰アコンカグアからの滑降、世界七大陸最高峰全峰からの滑降を成功させた。90歳を超してもなおモンブラン氷河滑降の挑戦を続けた実父やオリンピックに出場した次男らスキー、冒険に夢をかける新しい日本人家族像を体現している。

第3回(1993年) 宮脇俊三



1926年～2003年。東京生まれ。東京大学卒業。編集者、紀行作家。中央公論社で編集者として活躍し、北杜夫など多くの作家を世に送り出した。退職後は紀行作家となり、鉄道旅行に勤しむ。1978年、『時刻表2万キロ』で日本ノンフィクション賞を受賞し、作家として認められる。鉄道ファンながらも歴史や風土に裏打ちされた紀行文を得意とし、汽車旅は世界の果てまでに及んだ。それまで撮影や模型に限られていた鉄道趣味の分野を広げ、いわゆる“乗りテツ”を誕生させ、鉄道旅行の楽しみ、紀行文の魅力を一般に知らしめた。

第6回(2013年) 椎名誠



1944年～。東京生まれ。東京写真大学中退。作家、写真家、映画監督。1979年、『さらば国分寺書店のオババ』でデビュー。“昭和軽薄体”と称された独特の文体、大胆な表現で、たちまち文壇の注目を集める。日本各地、世界の辺境へと好奇心の赴くまま頻りに足を運び、紀行作家、旅行家としても活躍する。1989年、『犬の系譜』で第10回吉川英治文学新人賞受賞。1990年、『アド・パード』で第11回日本SF大賞受賞。代表作に『あやしい探検隊』シリーズ、家族をモデルとした『岳物語』など。

第7回(2023年) 受賞者 池澤夏樹



1945年～。北海道帯広市生まれ。作家。小学校からは東京で育ち、30代の3年をギリシャで、40～50代の10年を沖縄で、60代の5年をフランスで過ごして、今は札幌在住。ギリシャ時代より、詩と翻訳を起点に執筆活動に入る。1984年、文明への懐疑と人間の性を描いた『夏の朝の成層圏』で長篇小説デビュー。1987年発表の『ステイル・ライフ』で第98回芥川賞を受賞し、ワープロで書いた初めての芥川賞作家となる。その後の作品に『母なる自然のおっぱい』(読売文学賞)、『マシアス・ギリの失脚』(谷崎潤一郎賞)、『楽しい終末』(伊藤整文学賞)、『静かな大地』(親鸞賞)、『花を運ぶ妹』(毎日出版文化賞)など。自然と人間の関係について明晰な思索を重ね、数々の作品を生んでいる。2014年より全著作の電子化プロジェクト「impala e-books」を開始。また「池澤夏樹＝個人編集 世界文学全集」全30巻に続き、「池澤夏樹＝個人編集 日本文学全集」全30巻の刊行を開始。世界を辺境から見つめるのが池澤夏樹流。文学の眼鏡と科学の眼鏡を携えて、今日も旅先で執筆を続ける。(公式サイトより)

兼高かおる賞

150余りの国々取材し、TBS系テレビの長寿番組『兼高かおる世界の旅』(1959年～1990年)で知られた兼高かおるは、海外旅行ブームをけん引したジャーナリストであり、兼高に憧れ、旅行業界のリーダーあるいは作家や文化人を目指した人々は数知れません。また、当協会初代会長・斎藤茂太のあとを継ぎ2代目会長、さらに名誉会長として、会員に指針を与えてこられました。しかし残念ながら2019年1月に90年の生涯を閉じました。当協会は兼高の業績を称えるとともに遺志を受け継ぎ、その名が後世にまで語り継がれてゆくことを願い、一般財団法人兼高かおる基金とともに本賞を創設しました。



写真提供：(財)兼高かおる基金

第1回(2021年) ヤマザキマリ

1967年～。東京生まれ。漫画家・随筆家。東京造形大学客員教授。1984年にイタリアに渡り、フィレンツェの国立アカデミア美術学院で美術史・油絵を専攻。比較文学研究者のイタリア人との結婚を機にエジプト、シリア、ポルトガル、アメリカなどの国々に暮らす。2010年『テルマエ・ロマエ』で第3回マンガ大賞、第14回手塚治虫文化賞短編賞受賞。2015年度芸術選奨文部科学大臣賞新人賞受賞。2017年イタリア共和国星勳章コメンダトーレ授章。著書に『国境のない生き方』『ヴィオラ母さん』『スティーブ・ジョブス』など。



第2回(2023年) 山口智子

1964年～。栃木市生まれ。俳優。青山学院女子短期大学家政学科卒業。23歳でNHK連続テレビ小説のヒロインオーディションに合格し、『純ちゃんの応援歌』で俳優デビュー。以後、テレビ・映画など数多くの作品に出演し、同世代の女性の圧倒的な支持を集める。紀行・美術ドキュメンタリー映像にも数多く出演し、日本の伝統工芸や職人技を追いかけ、執筆活動も行う。2010年から世界を旅して多様な音楽文化を映像ライブラリーに収めるプロジェクト「LISTEN」を開始し、2022年には音を体感できる書籍「LISTEN」を発刊。



斎藤茂太賞

斎藤茂太賞は、長年にわたり世界と日本の旅行文化の発展に貢献した当協会創立会長の故・斎藤茂太の功績をたたえその志を引き継ぐために、旅にかかわる優れた著作を表彰することを目的に2016年に創設いたしました。

選考にあたっては、『旅』を広い視野の中でとらえ作品評価すると同時に、これからの旅行文化にインパクトを与える斬新な書き手の発掘をめざしています。



第1回 斎藤茂太賞

星野 保：著『菌世界紀行—誰も知らないきのこを追って—』(岩波書店)

北極、南極、そしてシベリア。大の男が這いつくばって、世界中の寒冷地にきのこを探る。大型動物との遭遇、酔っぱらいとの遭遇、泥酔、泥酔、そして拘束。幾多の歎難辛苦の果てに、菌たちとの感動の対面はかなうのか…!? 雪や氷の下でしたたかに生きる菌たちの生態とともに繰る、爆笑・苦笑・失笑必至のとおき“菌道中”。(「BOOK」データベースより)



第2回 斎藤茂太賞

今尾 恵介：著『地図マニア 空想の旅』(集英社インターナショナル)

地図には手に持って土地を歩くという実用的役割と、その土地の昔の地形や地名などを調べるための資料的役割がある。世に出回っている「地図本」の多くは後者であり、地名や地形、土地の歴史などを地図から読み取って記述するものである。だが、地図研究家が地図から読み取るものはそうした情報だけではない。地図の中でも特に「地形図」は高度に記号化された存在で、熟練した読み手の脳内には鮮明な風景イメージが浮かび上がる。地図を見ながら同時に空想で旅ができてしまうのだ。



第5回 斎藤茂太賞

若菜 晃子：著『旅の断片』(アノニマ・スタジオ/中央出版)

著者の濃(こま)やかな視点による表現は、ある場所、ある時間の、ある風景をくっきりと浮かび上がらせ、読者自身の記憶のようにさえ感じさせる力を秘めている。「旅の夜」からはじまり、旅先はメキシコ、イギリス、キプロス島、インド、ロシアのサハリン、スリランカなど多種多様。自然、人、食べものや文学など、著者の多角的な興味や造詣の深さを感じる一冊。



第6回 斎藤茂太賞

山本 高樹：著『冬の旅 ザンスカール、最果ての谷へ』(雷鳥社)

インド北部、ヒマラヤの西外れの高地、ザンスカール。厳寒期の1、2月になると、凍結したザンスカール川を歩いて行き来できる幻の道「チャダル」が現れる。しかし、冬のザンスカールの真の姿を見届けるには、チャダルを歩いて辿り着ける場所からさらに奥へと踏み込んでいかなければならないことは、あまり知られていない。マイナス20℃にもなる極寒の世界の中、ザンスカールの最深部の「知られざる祭礼」を目指した4週間の「冬の旅」の記録。



第7回 斎藤茂太賞

佐藤 ジョアナ玲子：著『ホームレス女子大生 川を下る in ミシシッピ川』(報知新聞社)

1996年、東京都港区生まれ。日比ハーフ。東京都立工芸高校卒業後、アメリカネブラスカ州の大学に留学し生物学を学ぶ。その後、コロラド州の製菓工房で修行し、2022年2月から5カ月をかけて、ヨーロッパ第2の大河、ドナウ川の川下りに挑戦した。第2作はそのドナウ川下りの記録になる予定で、目下アマゾン川下りも計画中。<ツイッター>



第8回 斎藤茂太賞

デコート 豊崎アリサ：著『トゥアレグ 自由への帰路』(イースト・プレス)

ジャーナリスト、写真家、ドキュメンタリー映像作家。日本人とフランス人の両親を持つ。アフリカでは通訳(JICA)、またキャラバンの一員となり、トゥアレグ族の遊牧生活を支援するためにサハラ・エリキ協会を創立。2011年3.11の東日本大震災を機にジャーナリスト活動を始め、パリ、東京、ニジェールという3カ所の拠点を行き来しながら取材を続けている。2015年「ニジェールとウラン鉱山」取材。SEPM(報道雑誌連合組合)のBest Investigation賞受賞。パリ3区で「ウラン鉱山とトゥアレグ族」の写真展と講演を開催。2016年、「Caravan to the future」(3000キロを横断する塩キャラバンの日常を描く60分ドキュメンタリー)撮影。アップリンクをはじめ、ニジェール、フランスなどで上映トーク。



第1回 斎藤茂太賞・特別賞

田中 真知：著『たまたまザイール、またコンゴ』(偕成社)



第2回 斎藤茂太賞・審査員特別賞

村上 大輔：著『チベット 聖地の路地裏—八年のラサ滞在記』(法蔵館)



第3回 斎藤茂太賞

若林 正恭(オードリー)：著『表参道のセレブ犬とカバーニヤ要塞の野良犬』(KADOKAWA)

航空券の予約サイトで見つけた、たったひとつの空席。何者かに背中を押されたかのように、一人キューバに旅立った3泊5日の弾丸旅行の記録。人見知りの著者と人見知りのガイドとのやりとりが面白い。キューバは良かった…そんな旅エッセイでは終わらない、ユニークな視点に満ちた作品。プライベートで撮影した滞在中の写真も多数掲載されている。



第4回 斎藤茂太賞

たかはた ゆきこ：著『おでかけは最高のリハビリ! 要介護5の母とウィーンを旅する』(雷鳥社)

脳出血の後遺障害で要介護5になった母と40代独身・介護離職した著者が、音楽の都ウィーンを目指した怒涛の三年間。「人生を楽しむ」をモットーに、計画し、準備し、手配し、そして旅に出る。そのすべてが、また最高のリハビリでもあることを実証する感嘆の旅行記。



旅の良書

斎藤茂太賞の狙いでもある「旅行文化の興隆と紀行文学の発展を願うこと」の共通のテーマをもちながら、斎藤茂太賞の目的の一つが「若い作家の発見」という側面とすれば、この「旅の良書」は、中学生以上(小学生も一部対象か)を対象として、真に読ませるにふさわしい「旅」の良書を選出します。したがって対象作家は、有名無名は問いません。

斎藤茂太賞の選考過程でセレクトしたすべての作品を対象として、斎藤茂太賞の選考システムを活用して斎藤茂太賞実行委員会が選考・選出し、日本旅行作家協会の理事会の承認を経て認定いたします。2019年に創設し今年が第5回目の発表となります。日本旅行作家協会選定の「旅の良書」マークを、選ばれた「旅の良書」の版元へ無償で提供しています。



J 日本旅行作家協会

ホームページ全面リニューアル

2023年9月より日本旅行作家協会のホームページをより見やすく、使いやすく、全面的にリニューアルいたしました。

- ①レスポンシブデザインで、スマホやタブレットでも文字や画像が縮小されことなく閲覧できます。
- ②グローバルメニューの採用で、ウェブサイト全体のコンテンツ構成や自分が閲覧しているページの位置をわかりやすくしました。
- ③会員のみが閲覧できる専用ページを設けました。総会資料やニュースレターをダウンロードできます。

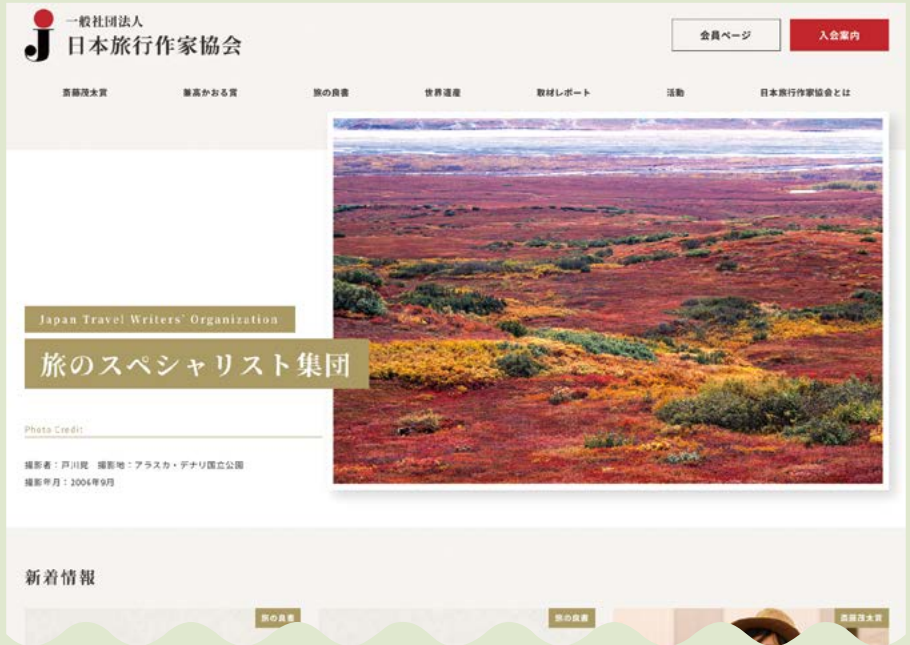
<https://jtwo.net>



会員ページ



トップページ



高藤茂太賞ページ



一般社団法人
J 日本旅行作家協会

〒104-0061 東京都中央区銀座1-5-5 明興ビル4F

TEL : 03-3538-2345

FAX : 03-3538-2346

E-mail : jtwo@minos.ocn.ne.jp

表紙イラスト：種村 国夫
編集：西 樹里
レイアウト：立岡 博
敬称は見出し文中と必ず略